

「点は線になる」

目白がん哲学外来カフェ・スタッフ 土肥 研一



私は教会で牧師の務めをすると共に、出版社で書籍編集者としても働いています。こういう仕事のおかげでいろいろな出会いを与えられます。先日もある方と親しくお話をすることがあり、深い印象を受けました。

お父さまを高校三年生のときに亡くした方でした。ある夜、突然クモ膜下出血で倒れ、そのまま亡くなってしまったのです。辛い思い出で、長くきちんと思い出すこともできなかつた。しかしそれから四半世紀が経って今、「あの父との別れがあって、今日の自分がある、と思えるようになった」とおっしゃっていました。

今、その方は、国立がん研究センター中央病院でプレイセラピストとして働いています。お母さんやお父さんががんになった、その子どもたちの心を支える働きをしています。

その方のお話で、特に心に残ったのは「点は線になる」という言葉でした。

私たちは、苦しみを経験するとき、突然の不条理に襲われるとき、その出来事を「点」だと感じます。自分の人生のどこにもつながらない「点」だ、と。

しかし時の流れと共に、それが「線」になっていくんですね。10年、20年とたつて振り返ったとき、「確かにあは、ないほうがよい点、思い出したくもない点だったけど、でもあの点と今の自分はしっかりつながっている」、そういうふうに感じられるようになる。その点に、新しい意味が与えられていく。「点は線になる」。

私は、神さまでそういう方だよなあ、と知らされました。点を線にしてくださる方。私たちの人生に散らばった点に光を与えて、星座のように結んでくださる方。私たちの目白がん哲学外来カフェもそのために用いられたい、と願っています。

「松本がん哲学カフェ1周年を迎えて」

松本カフェ代表 齋藤 智恵美



昨年7月から松本市の公民館をお借りして、月に1回開催してきた「松本がん哲学カフェ」。様々な方々のお力をお借りして1周年を迎えることが出来ました。運よくカフェの開設直前に参加したコーディネーター養成講座で、「がん哲学の原点」というテーマでのグループディスカッションの機会を頂きました。そこで松本がん哲学カフェの“原点”となるものを持ち帰ることが出来ました。その原点のキーワードがまさに『空っぽの器』でした。

医療関係の仕事に就いているわけでもないただのがん患者の一人であった私が、がん哲学カフェを開催するにあたり、この『空っぽの器』というキーワードは大きな勇気と道しるべを与えてくれました。“癒す側”と“癒される側”。がんと向き合いながら生き始めた時の私にとって、それはとても窮屈な空間でした。「病気であっても病人ではない」樋野先生の言葉にもあるように、対等である人間同士の対話を求めているのだと思います。それを実践する場となったのが、『松本がん哲学カフェ』でした。場所を作り、お菓子とお茶を用意する。目の前の人の人生に興味を持つ。それが私にできる精一杯でした。1年経って周囲を見回した時、そこには参加して下さった方々の“思いやり”や“哲学”がたくさん集まっていることに気が付きました。何も気張ることはない“空っぽ”で構わない。たくさんの方が私の空っぽの器に“気づき”や“温かさ”という水を注いでくださいました。

編集後記: 今回、お二人の方にご寄稿頂きました。

スタッフとしてがん哲学カフェを支えていらっしゃる土肥研一さん、そして、齋藤智恵美さん。人生楽しいことも苦しいこともあることでしょう。しかし、その全てがあって今の自分自身を創り出しています。今までとこれからの出会いを大切にしていきたいですね。

これからも多くの方の温かさや愛で、空っぽの器が満たされていきますように。

編集: 齊藤 志保 制作: 山田 真子

Eメール: shihoabamakoto@gmail.com

一般社団法人がん哲学外来ホームページ <http://www.gantetsugaku.org/>

